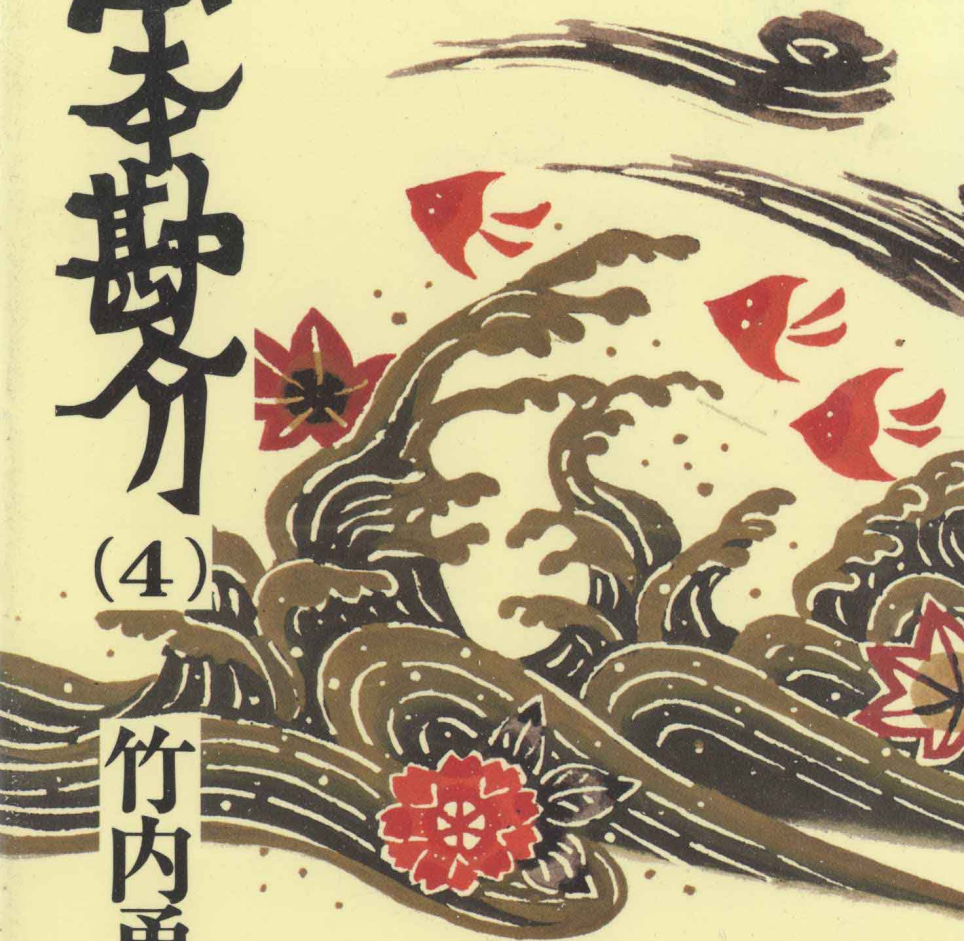


# 半助介

(4)

竹内勇太郎



# 本勘介 (4)

竹内勇太郎

学習研究社



**著者略歴** 大正九年、山梨県生まれ。地方の新聞社に勤務の後、テレビ放送開始とともに脚本家としてデビュー。「赤胴鈴之助」「東京の人」「三匹の侍」など初期の代表作から最近の「新五捕物帳」まで作品多数。劇作もやるほか小説も手がけ、「小説樋口一葉」「女俠曼陀羅」「飛驒の女」などがある。

山本勘介 4

昭和六十年九月五日 第一刷発行

著者 竹内 勇太郎

発行者 鈴木 泰二

発行者 株式会社 学習研究社

東京都大田区上池台四ノ四〇ノ五

郵便番号 一四五

電話 東京七二〇局 一一一一

振替 東京八一四二九三〇

印刷

信毎書籍印刷株式会社  
株式会社美術版画社

© YÛTARÔ TAKEUCHI Printed in Japan 1985  
165 244—1002 ISBN4—05—101031—7 C0393

※この本に関するお問合せなどありましたら、文書は東京都大田区上池台4の40の5（〒145）学研お客さま相談センターへ、電話は東京（03）720—1111 へお願いいたします。

※本書内容の無断複写を禁じます。

目

次

瀬戸の宝島

7

瀬戸の海戦

51

海の稲妻

93

孤島の異邦人

153

脱  
出

出  
雲  
の  
阿  
国

信  
虎  
狂  
乱

195

238

300

装幀  
川田 幹

挿画  
木俣清史

山本勘介

4



(新聞連載小説「風のごとく 火のごとく」改題)

## 瀬戸の宝島

翌朝、香蘭<sup>こうらん</sup>の給仕で食事を済ました頃、権六<sup>ごんろく</sup>が顔を出した。

「これから、ご案内申す」

権六は、横目で香蘭の顔をチラチラ見ながら、くすぐったそうな表情で言った。  
「どこへですか」

勘介が不審顔で権六を見た。

「石室島<sup>いしむら</sup>の弥吉<sup>やきち</sup>の所です」

「弥吉……」

「瀬戸内きつての腕の良い船大工です」

「それは忝<sup>かたじけ</sup>ない」

勘介が大きくうなずいた。

「しかし、勘介どのも酔狂な方ですな」

権六が、苦笑して言った。

「天下の武芸者が、船大工の弟子に……どういいうおつもりです」

「いや……」

勘介は、あいまいに笑った。

海を識るためには、まず船を識ることだ。船を造るということは、海の全てを識りつくした者でなければ出来ない。櫓一つ、舵一つにも、海を熟知した上でなければ出来ない巧技がある。

勘介が、船大工の修業を思いたったのは、それを思ったからである。

——勘介が、他の大名に仕官するならともかく、俺の領海内で船大工の修業するというなら問題は無い。

村上武吉は、勘介の願いをあっさりと承知した。

「船大工の弟子に、勘介さまが……」

香蘭は、あきれ顔をみせた。

「そうだ。暫くは船大工の修業をするつもりだ」

「では、石室島に行かれるのですか」

「そうだ」

「では、私も参ります」

「これ」

権六が、ことさらに渋面をつくった。

「勘介どのは、身分をかくして弥吉の弟子になられるのだ」

「身分をかくして……」

「当たり前だ。天下無双の武芸者、山本勘介と聞けば、いくらヘソ曲りの弥吉でも震え上がる」  
「私は、ただの流れ者の勘介……そういうことになっているのだ」

勘介が、笑いながら言った。

「では、私はその妹の香蘭」

彼女は、まだ諦めきれない。

「駄目だ、駄目だ」

権六が、首を振った。

「お前は、能島城に残っている……勘介どのは一人で石室島に行かれるのだ」

「でも、権六さま」

「くだいな、香蘭……お屋形さまのお言葉だ」

権六が、強く香蘭をたしなめた。

勘介は、武吉の所に顔を出して礼をのべると、その足で権六たちが待つ小早船に乗った。

小早船は小型の関船で、四丁櫓だが船足が速い。

石室島は、倉橋島と中島の中程、来島海峡寄りの孤島である。

内海一の船大工、弥吉はこの石室島の伏の湊に仕事場を持っている。

「念のため、申し上げておきますが」

激しい潮の流れを、たくみに乗りきって進む小早船の上で、権六は神妙な顔つきで、勘介に言った。

「弥吉と申す男は、腕は良いが少々偏屈で短気、粗暴なところもある変わり者です」

「なるほど」

「そのため、弟子入りしても二、三日で逃げ出す者も多いそうです」

勘介は、微笑しながらうなずいていた。

程なく、勘介の視野に石室島が入った。全島、深いみどりに包まれた小高い丘のような島であったが、切りたった断崖だんがいがそのまま海の中にのめり込んだように、殆どほとん港らしいものが見えなかった。

小早船は、大きく迂回うかいして島の裏側に出た。

僅わずかかに港らしい海岸線の入りくんだ平坦地が見えた。船は岸に乗り上げるようにして止まった。

「ここが、伏の浦です」

権六が、岸辺の岩床の上に立って説明した。

右方に、造りかけの関船らしい二隻の船がならび、四、五人の男たちが手斧ちようなを振っていた。

「おい、弥吉はどこにいる」

権六が、男たちに訊きいた。

「ここにいる」

外そと臚らの下から、小柄だが精悍せいかんさをみなぎらした老人がのっそりと姿をみせると、勘介たちの方に近寄って来た。

「早速だが、弟子入りたい男をつれて来た」

権六が、勘介を紹介するように、弥吉から勘介に視線を移しながら言った。

「弟子を……」

弥吉は、窪んだ眼窩から鋭い光をみせて勘介をジロリと見た。

「折角だが、弟子はいらん」

「そう言うな、お屋形さまからのお言葉だぞ」

「お屋形さまがなんと言おうと、いらぬものはいらん」

「相変わらずだな、貴様は」

権六が、閉口したように笑った。

「とにかく、引きとって貰わんと俺の立場がないのだ。頼むぞ、弥吉」

「断る」

弥吉は、くるりと背を向けると、ゆっくりと仕事場の方へ歩き出した。

「暫く……暫くお待ち下さい」

勘介は、弥吉を追って前に進んだ。

「手前は勘介と申す未熟者……弥吉どののお名を慕って遠路より参った者です。なにとぞ、ご指導を……お願い申し上げます」

その勘介の言葉に、弥吉は振り返った。

「その侍言葉が気にいらねえ……船大工は侍の趣味や道楽じゃねえ」

「しかし……」

「さっさと帰りな……早く、この島から出て行くんだ」

弥吉は、睨むように勘介を見据えると、大股で去りかけた。

「一寸、お前さん」

その時、艶のある女の声がとんだ。

勘介が振り返ると、麻の帷子を裾短に着た櫛簀姿の若い女が、海はおずきを噛みながら佇んでいた。

「せっかく、遠くから訪ねて来たんだ。引き受けてやったらどうなのさ」

女は伝法な口調で、弥吉にそう言った。

「女の口出すことじゃねえ」

弥吉は、女に背を向けたまま言った。

「あまのじゃくだからねえ」

女は、鼻に小皺をみせて笑った。

「勘介さんて言ったね、お前さん」

女は、勘介に近寄ると眸を細めるようにして、しげしげと勘介をみつめた。

「はい」

「侍だろ、お前さん」

「牢人です」

「その牢人さんが、なんで船大工になりたいのさ」

「はい」

咄嗟に、勘介は返事に困った。

「牢人は、いつまでたっても牢人だ。この辺で侍にみきりをつけて、腕にしっかり職をつけて

……そうだろう、勘介さん」

権六が、笑いながら言った。

「その通りです」

勘介が、うなずいた。

「分かったよ」

女は、小麦色にやけた顔に微笑をみせた。

「当分、家にいなよ」

「はい」

「変な顔することはないやね。弥吉は私の亭主、心配いらないよ」

「ほう」

権六が、驚きの表情をみせた。

「すると、おぬしは弥吉の女房か」

「はいな」

「いつから……」

「もう、一年半にもなろうかね」

女は、ケロリとした顔で言った。

弥吉の女房は、十二、三年前に病で逝<sup>い</sup>った。

以来、弥吉は独り暮らしを続けていた。

「それで、おぬし……」



権六が、興味をみせて女の顔を覗き込んだ。

「そんなこと、どっちでもいいじゃないか」

女は、眉をひそめるようにして、権六の言葉を封じると、勘介の方に向き直った。

「おいで、家に案内してやるから……くわしい話は、今夜ゆっくり亭主と話しな」

そう言くと、女は勘介をうながすようにして歩き出した。

「行かれるがいい」

権六は、かすかな好奇心を顔に浮かべながら勘介に言った。

「では……武吉どのによろしく」

勘介は、権六たちに目礼すると女の後を追った。

岩床の突出した小道を二度ほど曲ると、僅かな平坦地が広がっていた。その平坦地に肩を寄せ合うようにして、板葺きの粗末な家が七、八軒立ちならんでいた。

「ここだよ、さ、お上がり」

弥吉の家は、さすがに船棟梁だけあって他の家よりも広く大きかった。女は朱色の肘掛けのついた籐の長椅子にゆったりと腰をおろすと、戸惑ったように佇む勘介をいたずらっぽくみつめた。

「ここへ、掛けなよ」

女は、長椅子に向き合うようにして置かれている、一人掛けの籐椅子を顎でしゃくった。

「はあ」

勘介は、おずおずと椅子に坐った。生まれてはじめての奇妙な腰掛けの感触であった。